

# 日本語と朝鮮語の逆接の「接続語」について

深見兼孝

## 1. はじめに

本稿は、日本語と朝鮮語の「接続語」のうちから「逆接」を表すものを取り上げ、日本語の小説とその朝鮮語訳を資料<sup>1)</sup>に、その使い分けに関する両言語の異同を明らかにしようとするものである。

## 2. 先行研究と問題点

日本語では文と文の論理的関係を表示する機能をもつ品詞として「接続詞」が設定されている。朝鮮語においてこれと同様の機能を持つものは、副詞の下位区分として「接続副詞」と呼ばれる<sup>2)</sup>。そこで、日本語の「接続詞」と朝鮮語の「接続副詞」を仮に「接続語」と呼ぶことにすると、両言語の逆接の接続語は次のようになる<sup>3)</sup>：

・日本語

シカシ、トコロガ

・朝鮮語

그러나, 그렇지만, 그런데

トコロガとシカシの違いについて、浜田(1995)は「[トコロガQ]という発話を行う話し手は・・・聞き手の知識の内容を予め予想しており、聞き手の知識からは予測不可能な内容をQとして提示する」(p.588)とし、そこに話し手の「意図性」を認めている。また、シカシについては、「シカシは基本的にPとQが一つのことながら共存する異なる二つの側面であることを示す」(p.591)としている。確かに次の(1)では、張という人物の声の調子は二つの属性を同時に持っており、これらは「一つのことながら共存する異なる二つの側面」として物理的に存在する。しかし、多くの場合、二つの出来事や状況が一つのことながら属すかどうかは、まったく話し手の判断によるであろう。したがって、シカシを物理的状況のみに依存して特徴づけることは妥当ではないだろう。また、それは浜田(1995)自身によるトコロガの特徴づけと次元が異なる。

(1) 張は低く {しかし/\*ところが} 有無を言わせぬ調子でつぶやいた。(浜田1995:589)

一方、朝鮮語の逆接の接続語の用法や機能の異同に関しては、管見では先行研究がない。しかし、これらが指示詞的語幹그러/그렇-と逆接の連結語尾 -나, -지만, -는데 が結合固定したものだとするれば、その機能もこれらに由来すると考えてよい。連結語尾 -나, -지만, -는데 について、이희자・이종희(1999)に次のように記述されている<sup>4)</sup>：

-나 I 前後の事実を対立的につなげることを表す。類義語 -지만。

-지만 1. ある事実を言い、それに対立する事実を言うことを表す。類義語 -나, -는데。

2. 前の言葉を認めるものの、後の言葉がそれに拘束されないことを表す。

関連語 -거니와。

3. ‘-는데’のように前提的事実を表す。関連語 -는데。

- 는데
- I 1. 後の節に表現される話を導くための説明的知識となる一般的状況を提示すること表す。参考：しばしば文章や物語の最初におかれる状況説明に用いられる。
  - 2. 後の節に表現される内容から説明または敷衍すべき対象を提示する意味を表す。
  - II 後で起こる行動の原因、理由、根拠などを前で提示する意味を表す。  
参考：後の節に主として勧誘文や命令文が来る。
  - III 後に来る事実と対立する事実を提示する意味を表す；‘-지만’, ‘-나’の意味。
  - IV 1. ‘-거늘’の意味を表す。参考：後の節は主に修辭疑問文が用いられる。  
2. ‘-는데도’の意味を表す。

ここで現れている‘-거늘’と‘-는데도’について、同じく이희자・이종희 (1999) に次のように記述されている：

- 거늘
- 1. すでに確実な事実として認められる事実があるとき、これに対立することを挙げて、次の言葉の根拠とみなす意味を表す；「事實はこうこうだが、それとは異なり」「～だが、それにもかかわらず」の意味。
  - 2. (修辭疑問文に用いられて) 二つの事実を対立させ、前の事実から推し量って後の事実が当然だの意味を表す。

-는데도 前の事実拘束されたり憚ることなく後の事実が展開されることを表す。

以上の記述から、-나, -지만, -는데の用法を「対立」、「不拘束」、「前提」の3つで捉えることができようである。すなわち、-나 は「対立」、-지만 は「対立」・「不拘束」・「前提」、-는데 は「前提」・「対立」・「不拘束」の用法を持っている、と言ってよいだろう。そして、-지만-と-는데-において、「対立」、「不拘束」、「前提」が이희자・이종희 (1999) の記載通りの順序で派生関係にあるとすると、これらは「対立」>「不拘束」>「前提」>「対立」>「不拘束」>・・・という循環的派生関係にある。そこで、-지만-は「対立」を派生の始点(原義)とし「前提」を派生の終点とする、とすることができよう。同様に-는데-は「前提」が派生の始点であり、「対立」が派生の終点となる。これにより、그러나, 그렇지만, 그런데の違いを、連結語尾としての-나, -지만, -는데の用法の、この派生の循環の中での始点と終点に関係づけることが可能となる<sup>5)</sup>。

ここで、シカシとトコロガが各々、그러나, 그렇지만, 그런데のうちの異なるいずれか一つと何らかの共通点があるとすれば、翻訳上多く対応しているはずである。そして、その共通点は、シカシとトコロガの違いの背後に潜み、かつ-나, -지만, -는데の派生の始点と終点にも関わるもののはずである。逆に、そのようなことがなければ、翻訳上の偏りは

見られない、ということになる。もっとも、この場合も、逆接の接続語としての 그러나, 그렇지만, 그런데の違いが何であり、それが -나, -지만, -는데 の派生の始点や終点とどう関わるかを明らかにする必要がある。

### 3. 分析と考察

#### 3-1 対応関係の概略

日本語のシカシ、トコロガが対訳でどのように翻訳されているかを示したのが [表] である (カッコ内は%)。「その他」には、그러나, 그렇지만, 그런데 以外の接続語で翻訳されている場合、接続語ではなく語尾で翻訳されている場合、あるいは翻訳で削除されている場合のすべて含む<sup>6)</sup>。

[表]

		그러나	그렇지만	그런데	計	その他	計
シカシ	A	128(76.6)	13( 7.8)	12( 7.2)	153( 91.6)	14( 8.4)	167(100.0)
	B	73(59.3)	7( 5.7)	2( 1.6)	82( 66.7)	41(33.3)	123(100.0)
	C	38(80.9)	—	1( 2.1)	39( 83.0)	8(17.0)	47(100.0)
	計	239(70.9)	20( 5.9)	15( 4.5)	274( 81.3)	63(18.7)	337(100.0)
トコロガ	A	—	—	2(100.0)	2(100.0)	—	2(100.0)
	B	—	1(16.7)	3( 50.0)	4( 66.7)	2(33.3)	6(100.0)
	C	1( 3.8)	—	23( 88.5)	24( 92.3)	2( 7.7)	26(100.0)
	計	1( 2.9)	1( 2.9)	28( 82.4)	30( 88.2)	4(11.8)	34(100.0)

[表]から分かるように、全体的に見ればシカシ、トコロガのいずれも 그러나, 그렇지만, 그런데のいずれかに翻訳されている比率が高く (各々81.3%, 88.2%), その中でもシカシは 그러나 に、トコロガは 그런데 に高い比率で翻訳されている (各々全体の70.9%, 82.4%)。この傾向は作品 A, C で著しい。作品 B は相対的にこの傾向が緩やかだが、それでも今見たいずれの比率も50%かそれを上回っている。作品 B の場合、「その他」へ翻訳されている比率が30%強であることが、作品 A, C との違いを生み出しているのだろう。しかし、シカシ、トコロガが 그러나, 그렇지만, 그런데 のいずれかに翻訳されている場合に限れば、シカシは 그러나 に、トコロガは 그러나 に高い比率で翻訳されている (各々73/82=89.0%, 3/4=75.0%)。

したがって、このような翻訳の偏りから見て、シカシと 그런데、トコロガと 그러나には何らかの共通性があるとすべきだろう。

### 3-2 그렇지만, 그런데, 그러나

まず、シカシが 그렇지만 や 그런데 に訳された例から見よう。

- (2) 「どうして、こんな時に船なんか出したんだ？」徹が怒ったようにいった。「まさか、こんなことになるとは思わなかったのよ」「しかしさ、小さな船じゃないんだもの。少しぐらいの風では、こんなことにならないよ。沢山の人を乗せているのに、何で気をつけなかったんだらう」

「어째서 그럴 때에 배를 낸다지?」도오루가 성난 듯이 말했다. 「설마 이렇게 될 줄이야 몰랐겠지.」그렇지만 작은 배가 아냐. 웬만한 바람에는 이런 일이 일어나지 않아. 많은 사람을 태우고 있는데 왜 조심하지 않는거야.」[A]

シカシが 그렇지만 に翻訳されているときは、上のように、会話において、話し手がシカシを用いて相手の意見に反対していることが多い。

- (3) 「かまわん。ここにいたまえ。幸長、彼は大丈夫だ。たった今、わしは彼に協力を要請し、彼のできる範囲でやってもらうことを応諾してもらった」「はあ——しかし……」しかし……」「大丈夫だ。君はいっしょにあれだけ潜水艇に乗っていてわからんのか？」

"괜찮아, 여기 있어. 유키나가, 오노데라는 상관하지 말게. 바로 지금 나는 그에게 협력을 요청했고 그는 할 수 있는 범위내에서 내게 도움을 주기로 승낙했네." 그렇지만……" "문제없어. 자네는 잠수정을 그만큼 함께 탔으면서도 모르겠나?[B]"

上ではシカシの後がないが、後続の発話が「大丈夫だ」で始まっている。この発話者は「はあ——しかし……」によって以前の自分の発話「彼は大丈夫だ（訳では「小野寺は構うな」）」が否定されたとはいかないまでも疑問視されたと解釈したことを意味する。それを打ち消すために再び「大丈夫だ」と言っているのである。次の例でも「通産大臣」は提示された考えに賛成していないと解釈するのに何ら困難はないだろう。

- (4) 国内はある程度食い荒らされても、世界全体にちらばった日本人や日本資本をトータルすれば、日本民族としては、ちゃんとソロバン尻があう、といったふうな考え方で……」「しかしですな……」と通産大臣は、口の中でもそもそといった。

국내는 어느 정도 잠식당해도 괜찮다, 대신 온세계로 퍼져나간 일본인과 일본 자본을 합계하면 일본민족으로서는 수지가 맞는다. 그런 식으로 생각해 보자는 것이오." 그렇지만……" 통산성장관이 우물거리며 무슨 말을 하려고 하자 수상이 말을 가로막았다. [B]

以上のように、シカシは相手の意見、考えに反対する内容が後に続く。この場合、相手の発話から話し手が相手の意見や考えをくみ取っていることもある。次の例(5)で啓造は、夏枝の「……この子を外に出しませんもの」という発話から、夏枝が子供のこと

は他人に知れないと考えていると判断し、「人は祝いに訪ねてくる」という自分の考えを提示することで、夏枝の考えに反対している。

- (5) 「ばかだねえ。二か月たったらこの子は生後五か月になってしまうよ。だれでもすぐわかるだろう」啓造は笑った。しかし夏枝は、ひるまなかつた。「いいえ、二か月たったら十一月も半ばを過ぎて寒くなりますわ。この子を外に出しませんもの」「しかし人は祝いに訪ねてくるよ。その時はどうする」

「이 바보야. 한 달이 지나면 이 애는 난지 다섯 달이 돼. 누구든지 곧 알아볼 수 있을 거야.」 게이조오는 웃었다. 그러나 나쓰에는 굽히지 않았다. 「그렇지 않아요. 두 달쯤 지나면 11월도 중순을 넘어 추워져요. 이 애를 문밖에 내보내지 않을 거예요.」 「그렇지만 사람들이 인사하러 찾아올 게 아냐. 그때 어떡하지?」 [A]

しかし、シカシに先行する内容は、相手の意見、考えにとどまらないようである。次の(6)では話し手の考えていることを話し手自身が否定している。また、(7)では話し手がある意図(「夏枝が陽子の出生を知って苦しむ」ようにしむける)をもって行ったことに対し、その意図は実現しない(どころか、その意図とは裏腹な事態(おれの方が、長い年月を苦しむ)が起こる)ことを予想している。一度表明した話し手自身の考えの否定としてよいだろう。

- (6) それは誰です。辻口ですか、奴ならおれは諦める。しかし他の奴だったら絶対諦めません

그게 누구니까? 쓰지구찌입니까? 그 친구라면 저는 단념하겠어요. 그렇지만 다른 놈이라면 절대로 물러설 수 없습니다 [A]

- (7) おれはその夏枝が陽子の出生を知って苦しむ日のために、あの子を引きとったのだ(しかし佐石の子と知って育てるおれの方が、長い年月を苦しむことだろう)

나를 배반하고 무라이와 내통한 나쓰에가 요오코의 내력을 알고 괴로와할 날을 위해 그 애를 맡은 것이다.)(그렇지만 사이시의 자식인 줄 알고 키우는 내 쪽이 오랜 세월에 걸쳐 괴로움을 남기게 될 것이다.) [A]

以上のことから、シカシが 그렇지만に翻訳されるときは、ある意見や考えに対して話し手がそれに反対したり否定したりする(以下「打ち消す」と言う)内容が後に続くと言える。その意見などはだれのものでもよい。

ところで、次の(8)では、シカシの後は「これまでで一番不安だった」という話し手の判断を述べている。したがって、シカシに先行する部分の表す内容の打ち消しではない。むしろ、類似の出来事に関して(より程度が高いという)判断をしていると言える。

(8) 「乳児院の子は、案外もらい手が多いのだ。その度におれは不安になる。しかし今度ほど不安なことはなかったぜ。敵の手に渡すわけだからな」

「유아원의 아이는 달라는 데가 많네. 그때 마다 나는 불안해. 그렇지만 이번처럼 불안한 적은 없었어. 적의 손에 넘겨 주니까 말이야.」 [A]

さて、ここまで述べたのは実は그렇지만の機能の反映である。つまり、그렇지만は意見や考えに対する打ち消しを導くか、類似の出来事に関する判断を導くのである。どちらも、話し手の意識としては、先行する内容と緊密に結びついているであろう。また、このような話し手の意識は、話し手が推論を行う過程で生じるものなので、誤解を恐れずに言えば、그렇지만の前後の内容は互いに論理的緊密性が高いと言えよう。もちろん、ここで言う論理とはあくまでも話し手の論理である。

これに対し、シカシが그런데に翻訳されている場合は、その前後の内容は事実（と相手または話し手が判断していることがら）に限られるようである。また、그런데で翻訳される例には、むしろ話の展開を示すと言った方がよいように思えるものがある。(9)がその典型である。(9)ではこの後惨事の様子が描写される。シカシ/그런데は「非常出勤の指令がくだった」ことから順当には予想されないことを導いているが、そのことによって新たな場面である惨事描写への導入として機能していると言えよう。新たな場面が展開されるのだから、その前後の論理的緊密性は非常に低いとすべきだろう。そして、これは그런데の特徴と見なしてよい。

(9) 震災発生と同時に、都下の全消防署には、非常出勤の指令がくだった。しかし、比較的被害の少ない地帯ではすみやかに動けるのに、被害の大きな地帯では、路上で火をふく自動車や、倒壊家屋にさえぎられて動けないという事態が生じ、都心部に無数に発生した火災の現場へ駆けつけることのできた消防車は、ごくわずかった。

지진 발생과 동시에 시내 전 소방서에는 비상 출동 지시가 내렸다. 그런데 피해가 비교적 적은 지대에서는 신속하게 움직일 수 있었으나 피해가 큰 지대에서는 노상에서 불을 뿜고 있는 자동차나 무너진 가옥 때문에 오히려 기동성을 발휘할 수 없는 문제가 생겼다. 도심부에서 수 없이 발생한 화재의 현장에 신속히 달려갈 수 있었던 소방차는 실제로 몇 대에 불과했다. [B]

次の例ではシカシ/그런데も事実ないし判断を導いているが、シカシ/그렇지만の(8)に比べると、前後の内容は明らかに異質的、相互矛盾的である。これも、그런데の前後が論理的緊密性の点で弱いことに起因すると言える。

(10) 「村井も悪い男じゃないんだ、アレで。しかし女ぐせがわるい」

「그렇지만 무라이도 나쁜 놈은 아니야. 그런데 여자에 대해서는 버릇이 고약하지.」 [A]

- (11) 今まで陽子の眉のあたりだけが佐石に似ていると思っていた。しかし今みると、頭の形や、顔のりんかくまでが、実によく似ていた。

지금까지 요오꼬의 눈썹 근처가 사이시를 닮았다고 생각하고 있었다. 그런데 지금 보니 머리 모양이나 얼굴 윤곽까지 꼭 닮고 있었다. [A]

- (12) いつものように「おかえりなさい」ととんできた陽子の頭を思わずわたしはなでてしまった。しかしそのあとが、たまらなかった。わたしは反射的にルリ子の死んだ姿を思い出したのだ。

여느 때와 마찬가지로 「어서 오세요」 하고 달려온 요오꼬의 머리를 나도 모르게 쓰다듬어 버렸던 걸세. 그런데 그 뒤가 참을 수 없었네. 나는 반사적으로 죽은 루리꼬를 생각하게 됐네.

[A]

次はシカシが그러나で翻訳されている例である。(13) は登場人物の思考を直接引用した部分(カッコ内)とそれを作者が描写した部分とからなっている。後者は話し手(この場合は作者)が事実として語っているものである。シカシ/그러나はその部分に現れている。

- (13) (佐石の子を育てるといったら、高木は、何というだろう。この間の様子では絶対に反対するだろうな) 望みうすような気がした。しかし何とか説得できるような感じもした。(汝の敵を愛せよ、には結局反対できないだろう)

(사이시의 자식을 기르겠다고 하면 다가기는 뭐라고 말할까? 저번의 태도로 미루어 보면 필경 절대로 안 된다고 반대할 테지.) 가망이 없을 것 같았다. 그러나 어떻게 해서든지 설득할 수 있을 것 같기도 했다. (<너의 적을 사랑하라>에 대해서는 결국 반대하지 못할 것이다.) [A]

實際、シカシが그러나で翻訳されているのは、多く地の文、つまり物語中の出来事や場面描写の中である。そこで、그러나は二つの事実を連結するのがその基本的な機能だと考えたい。また、物語の新たな展開を示す例は見当たらなかったところから、論理的緊密性から言えば、그런데ほど低くはないと言える。ところで、(14) では그렇지만に翻訳されている時と同じように、相手の意見、考えを打ち消す内容が後に続いているように見える。しかし、二つの事実を連結するのが그러나의基本的な機能だとすれば、話し手(幸長助教授)はここで事実の提示をすることで客観的姿勢を保とうとしているのではないだろうか。この部分は二人の科学者のやり取りなので、話し手が「ほとんど悲鳴に近い声で叫んだ」としても、客観性を取り繕うのはいわば習い性になっているであろう。

- (14) 「乱泥流だ！」田所博士は、日ごろに似あわず上ずった声で叫んだ。「キューネンとなえた海底乱泥流だ！——とすれば、おれたちは、世界ではじめてその実物を見たことになる」「しかし・・・こんな深海底で」幸長助教授は、ほとんど悲鳴に近い声で叫んだ。

"난니류!" 다도코로 박사는 평소와는 다른 상기된 음성으로 외쳤다. "큐닝이 주장한 해저 난니류라면 우리들은 세계에서 최초로 그 실물을 보는 거야." 그러나 이렇게 깊은 해저에서……"  
유키나가 조교수는 거의 비명에 가까운 소리로 외쳤다. [B]

さて、以上はすべてシカシの例である。したがって、シカシを論理的緊密性で捉えれば、그렇지만から그런데までの幅を持つことになる。これは、シカシとトコロガの違いを論理的緊密性では捉えられないことを意味する。

### 3-3 シカシとトコロガ

前節で揚げたシカシの例に共通しているのは、主題や場面の連続性とでも言えるもののように思える。그렇지만に翻訳された例では、打ち消しが後に続くので、当然、そこには一貫した主題が存在する。(2)では船の遭難、(3)では「彼」の適性、(4)では日本沈没後の対応、(5)では子供をどう扱うか、(6)では夏枝との結婚、(7)では苦しむのはだれか、(8)では乳児院の子を人に引き取ってもらうこと、が主題である。また、그런데に翻訳された場合も、(10)は村井、(11)は陽子の容貌のことであり、(12)はおそらく玄関のできごとであり、あらたな話が展開される(9)においてすらも、消防車のことを述べているのである。同じように、(13)(14)においても主題や場面は連続していると考えることができる。

シカシに対して、トコロガが用いられている文脈では主題や場面が転換ないし断絶していると感じられる。次の例を見られたい。

(15) 멘コイな、川に行こうかという、ウンとすぐついていっちゃったというんですね。ところが、川に行くと祭りのせい、だれもない。

애야, 냇가로 가지 않겠니, 하고 말했더니 응, 하고 곧 따라나서서래요. 그런데 냇가로 갔더니 축제 탓인지 아무도 없었어요. [A]

この例ではトコロガの後は「川」という新しい場面が変わっている。また、次の例では過去と現在が対比され、時間的に場面が変わっている。

(16) 彼はそういった組織を何となくおぞましく、得体の知れないそしてその背後には何か強烈な暗黒の力が渦まきからみあっている不気味なものと感じ、市民としては、その背後の闇に対して心の底で反発さえ感じていた。ところが、今彼は、そういった組織の連中と協同し、協同の組織によって遂行される、陰の仕事のまっただ中にまきこまれている。

그는 그런 조직에 대해 한 시민으로서 막연한 두려움과 함께 반감 같은 것을 느끼고 있었다. 그런데 지금 그는 그런 조직의 무리들과 함께 하며 어두운 작업 한복판에 휩쓸리고 있다. [B]



次の例でも、ソーシャルの活動時を基準にして、それ以前の人々の考え方とソーシャルの考え方の対比が行われている。

- (17) そんな馬鹿ばかしいこと、それまでは誰も考えなかった。無意味だと思われたし、そんなことははじめから正しいってことがわかっているというので誰も問題にしなかったの。ところがソーシャルは、じゃ、それがなぜわれわれにわかっているのか。わかっているとはどういうことかを考えました。

그렇게 어리석고 바보스러운 일에 대해서는 그때까진 그 누구도 생각지 않았죠. 무의미하다고 생각했고, 그런 것은 처음부터 옳다는 것을 알고 있었기 때문에 아무도 문제 삼지 않았습니다. 그런데 소쉬르는 그럼 그것을 우리들이 어떻게 알고 있는지, 알고 있다는 것은 도대체 어떤 것인지에 대해 생각했습니다. [C]

しかし、実際は場面や主題の断絶を示すようなキーワードは現れないことが多い。それでも、直観的に断絶感が感じられる。次の例を見られたい。なお、(19) ではその後再びバルトの話題に戻っているので、話の新たな展開とは言えないだろう。

- (18) 「情報理論の大家はつぼだのかん所などというし、田所先生は、科学者にいちばん大事なのはカンだというし——えらく古めかしいね」「ところが、そういったものがいかに必要かということは、まさに情報理論から帰結されてくるんだ」と中田は自信たっぷりにいった。

정보이론의 대가란 사람은 급소니 요혈이니 하고 떠들고 다도코로 선생님은 과학자에게 가장 요긴한 것은 육감이라고 하시고……. 너무 케케묵은 소리만 해." "그렇지만 그런 것이 얼마나 중요한가를 정보이론은 밝히고 있어." 나카다가 자신있게 말하면서 물었다. [B]

- (19) つまり『ミサをはしよる司祭のように』とバルトは言ってるけど、話のエピソードは尊重するものの、一方じゃそれを早めようとするの。ところが現代的テキストでは、これをやっちゃいけない。現代的作品で味わうべきはストーリーじゃありません。テキストに密着し、言語を吟味し、そして遊ぶこと。つまりバルトの言う『垂直の大騒ぎ』をやらなきゃならない。

즉 '미사를 생략하는 사제같이' 라고 바르트는 말했는데, 이야기의 에피소드를 존중하긴 하지만 한편으로는 이를 서두르고자 한 거지요. 그러나 현대적 텍스트에서는 이렇게 해서는 안 됩니다. 현대적 작품에서 음미할 것은 스토리가 아닙니다. 텍스트에 밀착해서 언어를 음미하고, 즐기는 것입니다. 즉 바르트가 말하는 '수직의 대소동' 을 해야 합니다. [C]

やはり、シカシとトコロガの違いは、場面や主題が連続しているか断絶しているかに帰すべきであろう。(18) のトコロガに続く内容は、相手への反論であり、論理的緊密性が高い。 그렇지만で翻訳されていることからそれを知ることができる。シカシも 그렇지만

で翻訳されうるので、シカシとトコロガの違いは論理的緊密性の違いでは説明できない。3-1の[表]で示したように、シカシもトコロガも、偏りはあるものの、그러나, 그렇지만, 그런데のいずれかに翻訳されうるので、なおのこと論理的緊密性を当てはめるのは適当ではないだろう。

シカシはその前後の場面や主題が連続している場合に用いられる。2で挙げた浜田(1995)の言う「一つのことから」に「異なる二つの側面」が共存する状況というのは、話し手が場面や主題が連続していると判断する状況の一つと解釈できる。一方、トコロガはその前後で主題や場面が断絶している。通常の語りや会話では主題や場面の連続が前提となるので、発話者はその前の発話から聞き手(その前の発話者)の知識の内容を押し量ることができる。したがって、これも2で挙げた浜田(1995)の言う「[トコロガQ]という発話を行う話し手は・・・聞き手の知識の内容を予め予想しており、聞き手の知識からは予測不可能な内容をQとして提示する」(p.588)と矛盾しない。また、予想しない発話を受けた発話はこの前提が成立しないので、トコロガは用いられないということになる。

### 3-4 再び그런데, 그렇지만, 그러나

3-2で述べた 그러나, 그렇지만, 그런데 の論理的緊密性の違いを、2で述べた -나, -지만, -데 の派生の始点および終点と関連づけると次のようになる。すなわち、「対立」を派生の始点とし「前提」を終点とする -지만 を持つ 그렇지만 が論理的緊密性に関して一番高く、「前提」を派生の始点とし「対立」を派生の終点とする -데 を持つ 그런데 は論理的緊密性が一番低い。また、「対立」のみを表す -나 を持つ 그러나 は論理的緊密性に関しては 그렇지만 と 그런데 の中間だとすることができるのである。

## 4. 結論

以上のように、シカシとトコロガの違いは主題や場面が連続しているかどうか、그렇지만 그러나, 그런데の違いは論理的緊密性が高いか低いかで説明される。ここで、主題や場面の連続性も論理的緊密性も、文脈上の結束性を形成する。したがって、i) 日本語と朝鮮語の逆接の接続語は文脈上の結束性によって使い分けられるが、ii) 文脈上の結束性は日本語では場面や主題の連続性に反映され、朝鮮語では論理的緊密性となって現れるとすることができる。場面や主題が連続しているかどうかの判断はきわめて状況依存的である。これに対し、論理的緊密性は前後の内容によるので、命題依存的とも言えるだろう。

また、シカシが多く그러나に翻訳されるのは、主題や場面の連続していることと論理的緊密性がある程度高いことが調和することが多いからであり、トコロガが多く그런데に翻訳されるのは主題や場面の断絶と論理的緊密性の弱さが共存することが多いからであろう。このことは、朝鮮語でシカシとトコロガを翻訳し分けるとき、朝鮮語の接続語の持つ

論理的緊密性に関わる性質はあまり必要とされないことを意味する。これも、日本語の接続語の状況依存性を裏付けるものであろう。

## 注

- 1) 資料は次の通りである(本文では A, B, C で示している) :
  - A: 三浦綾子『氷点(上)』角川文庫5025 角川書店1998年(第53版)  
[최현『빙점(上)』범우사르비아문고 27 범우사1989年(初版第11刷)]
  - B: 小松左京『日本沈没(上)』光文社文庫 光文社2000年(初版第2刷)  
[이정희『일본 침몰上』미래사 1995年(初版第4刷)]
  - C: 筒井康隆『文学部唯野教授』岩波書店1990年  
[김유곤『다다노 교수의 반란』문학사상사 1996年]
- 2) 韓国の標準文法による。韓国の標準文法で、なぜ接続詞が設定されず、副詞の一部とされるのかについては本稿の考察の範囲を越える。
- 3) 他にも、日本語ではダガ、ガ、ダケレドモ、ケレドモ、デモなどを挙げるができる。しかし、例えば、ダガ、ガは各々「体言(または形容動詞の語幹)+ダ+ガ」のダガの部分、「用言+ガ」のガの部分独立して文頭に用いられるのであって、共時的にもこれらとの強い有縁性が認められる。したがって、これらは本来文頭に立つ接続語とは言い難い。ダケレドモ、ケレドモについても同様なことが言える。また、渡部(1995)はデモを口語的だとする。口語的な接続語はいったん分離しておくのが無難であろう。一方、朝鮮語でも 하나, 하지만, 한테のような하다系の接続語を認定できるかもしれない。これらも、口語的性格が強いと思われる。以上のことから、今回は日本語ではシカシ、トコロガ、朝鮮語では 그러나, 그렇지만, 그런데のみを取り上げることとする。
- 4) -나 に関しては関連すると思われる部分のみを取り上げる。また、-는데 と本文中の引用にある -는데 は先行する語幹の品詞的性質によって使い分けられ、機能的な差はないものと思われる。
- 5) ただし、-나, -지만, -는데 の機能のどの部分が接続語としての機能に関わっているか、また、語形成の過程でそれがどのように変容されているか(あるいは変容を受けていないか)については、本稿では議論しない。
- 6) 接続語に関する日本語と朝鮮語の特徴をさらに深く理解するには、対応しない部分、とりわけ、朝鮮語で連結語尾に翻訳されている場合(2文対1文)や、日本語の接続語が朝鮮語訳で訳出されない場合(削除)も考察する必要がある。また、朝鮮語とその日本語訳を資料にした考察も必要であろう。あわせて今後の課題としたい。

## 言及した文献

- 浜田麻理 (1995) 「トコロガとシカシ・デモなど—逆接接続詞の談話における機能—」：  
宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』 pp.584-592  
くろしお出版
- 渡部 学 (1995) 「ケレドモ類とシカシ類—逆接の接続助詞と接続詞—」：宮島達夫・仁  
田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』 pp.593-599 くろしお  
出版
- 이희자·이중희 (1999) 『사전식 텍스트 분석적 국어 어미의 연구』 pp. 1-2, pp.38  
-39, p.45, pp.388-389. 한국문화사